

# 酒々井町郷土研究会々報

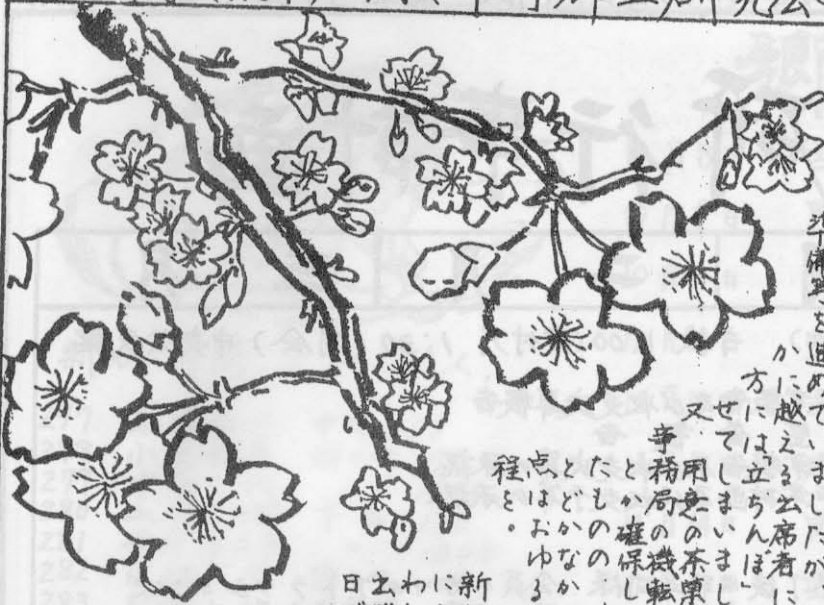
第24号

昭和57.4.14

発行  
酒々井町郷土研究会 総務部

120名が一堂に会し定時総会

新入会員29名を加え総勢313名



一月二十三日に開かれ、出席者百名を越え、準備等を進め、又争奪し、程とはどおのゆかりのたし

開かれ、出席者百名を越え、準備等を進め、又争奪し、程とはどおのゆかりのたし

日に出たてのし



ヨメナ  
春の七草  
オア科の植物で  
おひたし、あえの  
天ぷら、油いため  
などに。



ゼンマイ  
サッと茹でて  
一度乾燥。  
それをもどし  
て食べます。  
味は抜群。



タンポポ

タラの芽

野趣にとんだ味が  
珍重される山菜の王者。  
そのまぶ火であぶるもよし  
茹でて食べるもまたよし。  
されど天ぷらが一番。



ワラビ  
タンパク質を  
ふんだんに含  
有している。



ワラビ

タンパク質を  
ふんだんに含  
有している。



- 301 塚本 ひとこ
- 302 山内 智子
- 303 小川 博子
- 304 小原 田好子
- 305 武田 花子
- 306 小原 武三子
- 307 石島 辰夫
- 308 萩原 米子
- 309 那須 八郎
- 310 鈴本 茂
- 311 緒見 茂
- 312 高橋 保
- 313

## 酒々の春

摘みましたか？

食べましたか……。

東しおい、中央白へ新しく越され  
た皆さん、酒々井は山菜の宝庫です。  
身近に自然がたくさん残されています。  
郷土研の行幸のひとつ、しとつに、采  
しめを見つけて出して下さい。

落のとう  
生のまま細かくきざんで  
おみそで焼いて……。  
又マヨネーズであえても  
ほろ苦さと香りは独得。



ツバキ

頭が固くはな  
ていると摘むの  
がコフ。叩き  
つぶし、おみそ  
で焼いて、ほろ  
苦さと香りは  
独得。

## 新入会員の御紹介

- 285 石井 裕衛
- 286 松本 陸
- 287 宮本 博司
- 288 磯山 清一
- 289 永岡 志津
- 290 大友 英代子
- 291 横山 はな枝
- 292 沢村 免とよ
- 293 新内 山つね
- 294 内永 田原
- 295 永藤 美代子
- 296 藤原 真代子
- 297 綿村 真代子
- 298 綿村 真代子
- 299 綿村 真代子
- 300 綿村 真代子



# 酒々井宿と助郷村

相京 晴次

酒々井は、江戸時代から明治三十一年の鉄道開通まで成田街道の宿場町であったことはよく知られていますが、それでは宿場とはどんなことをしたのでしょう。

交通機関の発達しない時代の旅は足で歩くか、駕籠か、馬に乘るはかばかありませんでした。人だけの旅は割合に簡単でありましたが、荷物や物資の運搬は大変な労力でありました。

馬で運ぶ場合、小荷歌といつて、馬の背に荷物をつ付けて、こことこ運びました。

茶ならニ俵、薪炭は八束が一駄でありました。薪炭は八束が一駄でありました。

山坂が多く道が悪かったため、荷車の使用は明治以後道路が整備されてからになります。

荷物は宿場の一區間を運ぶまで、左倉宿から来た荷は成田宿まで成田宿からの荷は左倉宿までとなります。

そこで、宿場には宿場役人や問屋場役人などがいて、馬や人を足もそろえて取りまわりました。いつても日によって遠い村々から、代馬の時、附近の村々から、人馬の応援をうけることになっておりました。

この制度と助郷(すけごう)といいました。

助郷は、原則として公用に限られていたもので、江戸末期に類繁となり交通の便が一般の荷物まで助郷村にたよることになつてきました。

## 郷土研自誌

- |                |                 |        |
|----------------|-----------------|--------|
| 1月 19日         | 運営委員会           | 19名    |
| 23日            | 郷土研総会           | 120名   |
| (56年度決算事業報告承認) |                 |        |
| (57年度予算事業計画議決) |                 |        |
| 2月 1日          | 七草のゆ準備会         | 13名    |
| 5日             | 〃               | 〃      |
| 6日             | 七草のゆの会          | 17+63名 |
| 13日            | 古文書学習会          | 8名     |
| 14日            | 石俣調査(上岩橋)       | 7名     |
| 21日            | 文化財愛護協力(上岩橋貝會校) | 20名    |
| 3月 5日          | 見学会(本土寺外)       | 71名    |
| 9日             | 野草の会(床母)        | 18名    |
| 13日            | 石俣調査(下岩橋)       | 14名    |
| 14日            | 運営委員会           | 14名    |
| 19日            | 〃               | 〃      |

新が村宿活等れる賃郷郷  
 訴絶との場困はと金村  
 訟えの間助とでどとで  
 となつた二紛郷なり、生仕わ  
 たり身村、生仕わ



※後場内町史編さん室相京まで御連絡下さい。

より楽しく  
 より実りた  
 会報を作るために  
 皆さまの御協力とお願いいたします。  
 会報のスタッフに加わっていただけると、お声をかけて下さい。

もたくさんあります。酒々井  
 宿も例外ではありませんでした。

(助郷の窮当状)

### 覚

一馬三足 中川村

右者左倉柳家中御荷物御道  
 行二付、書面之馬、今壹九  
 ツ時(十二時)迄二当町参着  
 候様御申付可被遣候、尤様  
 佐倉迄

子二月二十一日

酒々井町  
 名主源右衛門

中川村御名主

酒々井宿の助郷村は、次の二  
 十七か村でありました。

(成田市) 台方、江井頭、大袋、飯仲、下方

(左倉市) 上勝田、下勝田、直赤、寒風、八木

(富里村) 新橋、中沢、新中沢

(酒々井町) 伊藤、伊藤新田、上岩橋、下岩橋、中川、柳木、尾上、飯積、墨、古沢、馬橋、下台、本佐倉村、本佐倉町

(深山武男家文書より)

現成田市、佐倉市、富里村など遠方からの助郷であり、酒々井宿までの往復の距離だけでも大変でした。

